

「志賀山流における技法の 段階的習得過程その3」

—女踊りを中心に—

志賀山 葵・志賀山 櫻

【目的】

日本舞踊最古の流派である志賀山流で、技法がどのような段階を経て習得されていくのかを、女踊りの「おすべり」の技法に注目して考察する事を目的とする。

【方法とその結果】

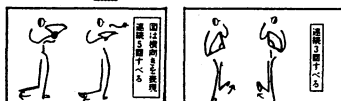
「おすべり」という技法は日本舞踊独特の技法で一方の足を上げて降ろし、もう一方の足を後方に床から離さずにすべらせ引く技法のことで歩行の変形と考えられる。古い流派ほど「おすべり」が多用される傾向にある。その「おすべり」がどのように習得されるのかを探る為に、初歩段階から「文がやりたや」、次の段階として「近江のお兼」「子守」、最終段階として「男舞」「京鹿子娘道成寺」を取り上げた。

—初歩段階のおすべり—

(長唄「文がやりたや」)

役柄は子供で、いわゆる手ほどきものといわれる易しい踊りで志賀山流ではまず初めに必ずこの曲を習得する事になっている。上半身には複雑な動きは無く体軸を真直ぐにする事に重点がおかれる。短い二分弱の踊りに八回も「おすべり」が使われている。

●各演目の技粋部分について () 部分におすべり有り
 文がやりたや 後のお兼様 取りやちがえて余の人に
 やるな 花のかの様の サア花のかの様の手に渡せ



つまり手ほどきものにこれだけ「おすべり」が出てくるのは、これからの習得過程において「おすべり」が非常に大切な技法である事がわかる。

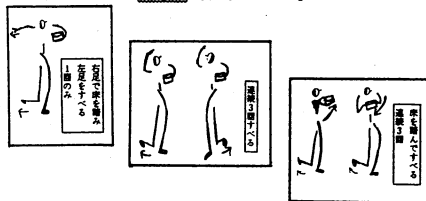
—軽い役柄のおすべり—

(長唄「近江のお兼」・清元「子守」)

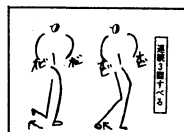
ここでいう軽い役柄とは、庶民的な娘を指す。つまり、「おすべり」の技法は足を引く時間が比較的速く、初歩段階の次のステップと考えられる。又、ここでは一方の足をトンと踏んでから(床を足で踏み音を出すこと)もう一方の足をすべらせるといふ「おすべり」の変形ともいえる技法も見られる。

初歩段階の次として、上半身の動きが少し複雑になり「おすべり」の変形も出て、難易度が高くなっていく。志賀山流では初歩段階である「文がやりたや」を経てからこの段階のものに入る。そ

近江のお兼 「とめてみよなら (合方) 栗裡に胡蝶 梅に鶯松の置
 きてはせな女が愉快 しょうがない



子守 「オヤツかな何としようえ アイタタタ膝頭をすりむいた (合方) 権
 い書づら油揚さらうた オヤ泣くなよい子じよ こんな物やうな!



の方が技法を習得しやすいという利点があるからであろう。

—重い役柄のおすべり—

(長唄「男踊」「京鹿子娘道成寺」)

ここでいう重い役柄とは白拍子というもので階級が上がり、成人した女性である。この役柄の「おすべり」は上半身の動きもより複雑で、ひねり、回転が加わり足をすべらせる時間もゆったりになったり、より速くなったりと多様化している。又、「おすべり」の回数も多くなり、連続十回という部分も見られる。

この「おすべり」が最も難易度が高く、技法そのものも多様化して習得もなかなか困難である。

男舞 「夏の月影艶か夜は (合方) やるせないではないかない サア!



【考察】

以上、数曲を取り上げてみたが、その中に「おすべり」の様々な技法がその段階ごとに存在していることが明らかとなった。これはつまり、易しいものからだんだんに難しいものへと稽古することによって「おすべり」の技法が段階的に身につくようなシステムが確立していることを表わす。また役柄によって同じ技法でも体の使い方などのテクニックは全く異なり、段階的に稽古していけば幅広い役柄が自然にこなせるようになっている。これは「おすべり」に限らず他の技法でも同様であり、先人の工夫が感じられる。